

助産学研究室 Midwifery



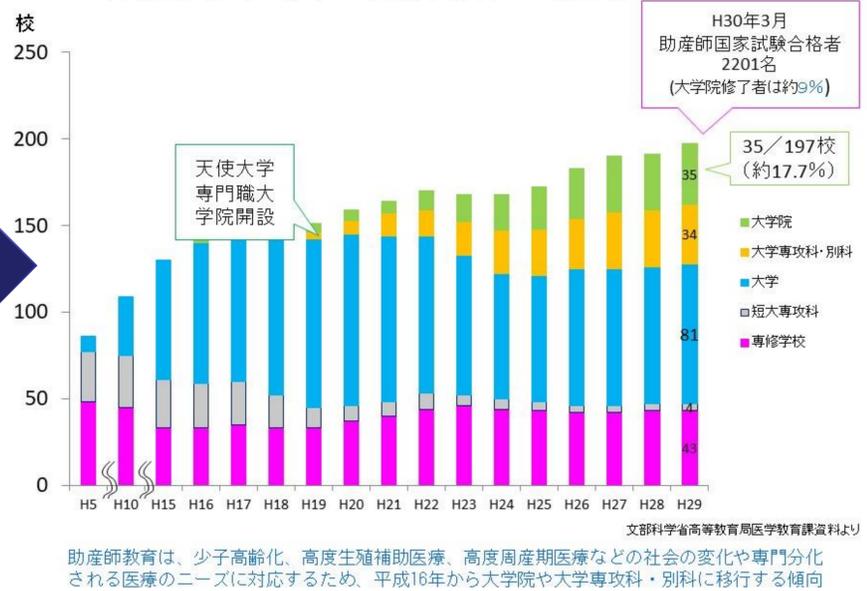
社会のニーズに応える、より専門性の高い自律した助産師の育成を目指し、全国に先駆けて、大学院で助産師教育を行っています。

社会の背景と助産師に求められる役割

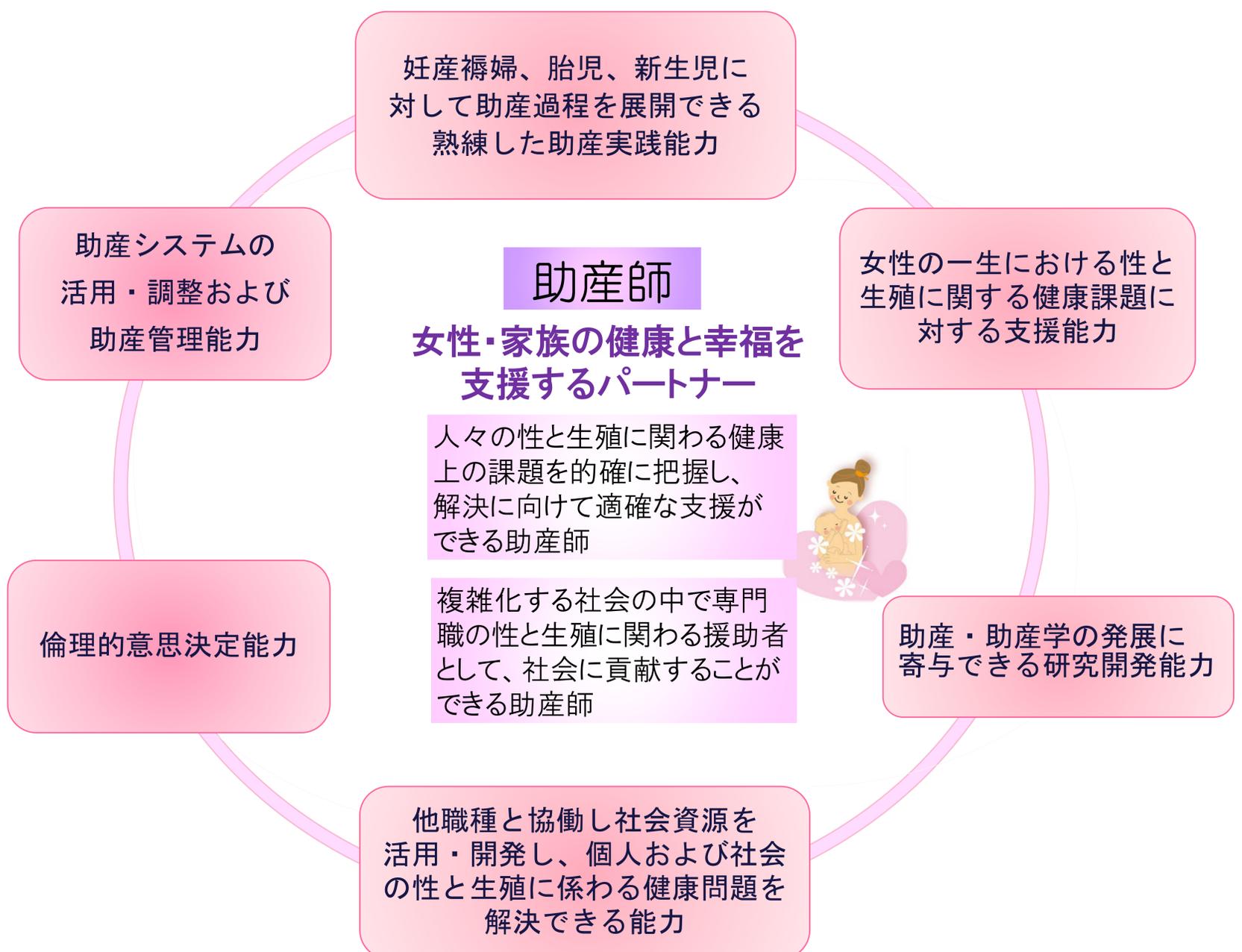
- 産科医の不足、産科施設の集約化による分娩施設の減少などにより、助産師には産科医との役割分担を行いながら産科分野での活躍が期待されている。
- 助産師が正常の妊婦健康診査と分娩を担うことで、妊産婦の多様なニーズに応えることが可能となり、結果として産科医の負担軽減につながる。そのためには、妊婦健康診査時の正常・異常の判別だけでなく、分娩時の緊急事態に対応できることが必要となる。
- 近年推進されている院内助産所や助産師外来では医療機関内という特性からリスクの高い妊産婦にも対応していくこととなり、助産師はより高い助産診断能力とともに医師との連携が重要となってきている。
- 出産年齢の高齢化により、ハイリスク妊産婦が増加し、外来における妊婦健康診査からMFICU(母体・胎児集中治療室)等において産科知識と合わせた妊娠・産褥期の生活支援に対する役割の期待も高くなっている。
- 思春期からのSTI(性感染症)予防やCV(家庭内暴力)・子ども虐待の予防と対応など、女性の性に関わる課題に対する助産師の活躍も期待されている。

看護教育の内容と方法に関する検討会報告
2010(平成22)年10月助産師教育ワーキンググループ

助産師学校・養成所の推移



本大学院が目指す助産師像と助産師に必要な6つの能力



助産学研究室

Midwifery



本学では、女性と家族の主体性を重視した安全安楽な出産への援助を中心とした、人間の生涯を通じた性や生殖に関わる保健活動について、広い視野で活躍できるよう段階的に学ぶことができます。

さらに、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざし、正常・異常に関わらずすべての妊産褥婦および新生児への科学的根拠に基づいた助産診断と助産ケアの実践ができる専門性の高い知識と技術を学びます。また、地域で生活する女性とその家族に求められる助産師活動について学びを深めることができます。

判断力・実践力を習得できる カリキュラム

助産学コースの特徴

- 助産専門科目 **20科目46単位** (指定規則28単位+18単位)
- 講義・演習に助産に必要な基礎看護技術や母性看護技術の**段階的OSCE** (客観的臨床能力試験)を取り入れている
- 超音波シミュレーター**や**会陰縫合シミュレーター**を使用した演習を行い、評価はOSCEを行う
- 保健指導演習は、妊娠期・産褥期、性教育について、指導案作成と**実演**(OSCE)を行う
- 性教育**は市内の小中学校で実際に実施
- 新生児蘇生法Bコース**取得
- 実習時間を確保し、1年後期から2年に計28週以上
- 継続事例**(妊娠20週頃～産後1か月)3例、3～4か月健診でも母児の成長・発達を確認できる
- 正常分娩の介助目標例数13例以上
- 分娩介助実習 分娩介助の**技術到達度評価表(3段階)**

助産学コースにおける段階的OSCE



助産学コースの教育進度



先輩の活躍する場所

- 院内助産・助産師外来を擁する病産院
- 分娩件数が1000件以上の施設
- ハイリスク妊産婦やNICUケアを担う総合周産期母子医療センター
- BFH(Baby Friendly Hospital:赤ちゃんにやさしい病院)
- 開業助産院
- 大学等教育機関



♡修了後の活動状況を語り合う会♡

研究紹介：課題研究テーマ

- ・地方で出産する母親のマタニティマークの利用状況と認識
- ・妊産婦の温泉入浴についての禁忌事項認知と利用頻度に関する実態調査
- ・妊活の講座を受講した20-30代男女のライフプランと生殖・不妊に関する認識
- ・離島の母親の産後1か月までの語りからみた出産・子育て支援のあり方
- ・熟練助産師が母体搬送を判断した根拠に関する研究
- ・乳幼児スキンケア用品の選定及び保管方法の実態
- ・妊娠中期における妊婦の抑うつ・不安と首尾一貫感覚・夫婦関係との関連
- ・非妊時やせ妊婦と周産期異常の関連からみた保健指導のあり方



積極的に学会発表を行い、社会への還元を行っています。